

合併の経緯－大宮町－

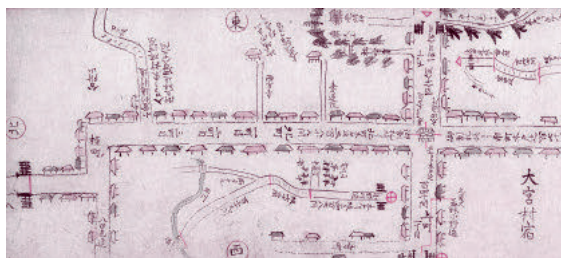
◇江戸時代は「部垂村」

旧大宮町は、市内の旧町村では唯一、明治の合併を経験せず、江戸時代の村域のまま昭和の合併を迎えました。当時の大宮町域は、現在の住所表記の12大字に相当する地域です。

旧大宮町域の現在の大字
栄町・南町・中富町・拙ヶ台町・上町・下町・北町・東富町・姥賀町・高渡町・野中町・田子内町

この地域の江戸時代の村名は「部垂村」でした。この変わった地名の由来には諸説ありますが（周辺に比べて高い土地だったので、その地形「辺垂れ」から起こった、等）、当時の村民から支持されず、天保14年に村名変更願が出され、鎮守甲大宮にちなみ、「大宮村」と改称されました。

江戸時代には水戸と奥州を結ぶ街道と久慈川の舟運の要衝として栄え、宿場が整備されていきました。安政2年（1855）頃の絵図には、町内の治安維持のために東西南北に設けられた木戸や、藩から村々に伝えられた触れを掲げた高札場（現在の下町交差点の位置）を見ることができます。



「北郡里程間数之記」の大宮宿（国立国会図書館蔵）

享保11年（1726）の記録では、太田村や石塚村などと並んで部垂村にも六才市（月6回の市）が設けられたことがわかります。経済の中心として宿場が発展していたことが伺えます。

◇明治以後の大宮町域

大宮村は、明治5年（1872）の大区小区制により、周辺の13か村とともに第四大区八小区になりました。その後、同17年の区域改正で上村田村・下村田村・石沢村と連合して「大宮村ほか三か村連合」となりました。

明治22年（1889）に施行された町村制では、一町村の戸数は300～500戸を標準とするよう示されました。県内の全市町村数が5分の1に激減する中、大宮村は合併することなく町制を敷いて大宮町が発足しました（『大宮町事績簿』によれば20年後の明治42年の戸数は460戸（大宮町文書No210））。このとき町となったのは、太田町や潮来町など県内で40町でし

た（水戸のみ市制）。

明治22年の合併後、役場は大宮町古城117番地（現在は大宮小学校敷地）に置かれました。その後昭和8年に大宮町北二丁目7番地（現在の大宮小学校西側の旧道入口付近）に移動します。周囲には銀行や商店が建ち並び、町の中心の一画でした。初代町長は宮田重徳、2代に旧水戸藩士の松井端が就任します。しかしその後は多治見國明（那珂郡書記）、齋藤高三（茨城県属）、再び多治見と、郡県の職員が就任し、多治見が明治29年5月に辞任したあとは明治45年の井坂正太郎町長の就任まで町長不在という混乱もありました。



旧役場跡地向かいに建つ合併30年記念碑



大宮町事績簿

◇昭和の合併と大宮町

昭和28年9月に町村合併促進法が施行されると、大宮町には昭和29年2月に合併調査会が組織されました。同会では玉川・大賀・上野・静・大場・世喜・大宮の1町6か村合併案と、これに瓜連を加えた2町6か村案が提示され、当初は後者が選ばれました。しかし同年12月の調査会から瓜連を除外して検討が行われ、昭和30年3月31日付で1町6か村案により合併し、大宮町が発足しました。さらに7月1日に塩田村が分村合併し、現在の大宮地域が形成されました。

鈴木きぬ子さんに聞き取り調査にご協力いただきました。

【参考文献】

塙泉嶺『那珂郡郷土史』宗教新聞社 大正12年、茨城県総務部地方課編『茨城県市町村合併史』昭和33年、『大宮町史』昭和33年、『大宮町史』昭和52年、木戸田四郎『明治維新の農業構造 増補版』御茶の水書房 1978